

『賦光源氏物語詩』を読む（三）

——葵・榊・花散里——

本 間 洋 一

九 葵

后腹三宮催御禊

后腹の三宮 御禊を催し

諸卿追從敬尊神

諸卿追從して 尊神を敬ふ

時権是重爭車日

時権は是れ重し 車を爭ふ日

露思忽瑩折扇辰

露思は忽かに瑩く 扇を折る辰

為雨為雲纔入夢

雨と為り雲と為りて 纔かに夢に入り

旧衾旧枕被埋塵

旧き衾 旧き枕 塵に埋めらる

何唯袖涙夾鍾礼

何ぞ唯だ 袖の涙は

夾鍾の礼のみならん

蕭索霜花猶駐勻

蕭索として霜花は猶し勻ひを駐む

（七律。神・辰・塵・勻（上平声真韻））

巻名が詩中に詠込まれていないという点でこれ迄のパターンと異なると言つても良いかも知れないが、とりあえず聯毎に訳出するとほぼ次のようになるだろう。

弘徽殿太后の女三宮（桐壺帝女）様が斎院となり賀茂の河原で御禊の儀式をなさるということで、上達部達も供奉申し上げ、尊き御神に敬意を払われたのでございました。

御禊当日の見物の場をめぐり左大臣家（葵の上様一行）と六条御息所様一行の間で車争いとなりましたが、時の権勢（左大臣家）の重さの前に御息所様にはお気の毒なこととなつてしまいました。また、（光源氏が紫の上と共に見物に出かけましたところ、雑踏の女車の中から誘いの扇が差出されましたが、その）端の折られた扇には露のように

かない思いを込めた美しい和歌が認められておりました(光源氏様はその筆跡から相手は源典侍様と思い出されたことでした)。

(葵の上様が亡くなりましたから) 巫山の神女と楚王のような夫婦の契りはわずかに夢にみるばかりのものとなり、かつてあの共に臥しくるまつた寝具(ふすまや枕)も塵の積るに任せるままとなつていて、でございます。

左大臣様が(光源氏様のことを意識されて)袖をぬらす涙を流されたのは、ただあの二月の花の宴の折のみのことではございません。(娘婿であつた光源氏様の立去られた物さびしい部屋に残された「霜華白し」等の筆跡や枯れた常夏(撫子。夕霧を暗示)に、左大臣様は心打たれつつもこみあげる無念さにたえきれずお泣きになられたこと、ございました。

首聯はほぼ次の本文をふまえたものである。

そのころ、齋院もおりゐたまひて、后腹の女三の宮ゐたまひぬ。帝・后いとことに思ひきこえたまへる宮なれば、筋異になりましたまふをいと苦しう思したれど、他宮たちのさるべきおはせず、儀式など、常の神事なれど、いかめしうの

のしる。祭のほど限りある公事に添ふこと多く、見どころこよなし。人からと見えたり。御禊の日、上達部など、数定まりて仕うまつりたまふわざなれど、おぼえことに容貌あるかぎり、下襲の色、表袴の紋・馬・鞍までみなとのへたり、とりわきたる宣旨にて、大将の君(光源氏)も仕うまつりたまふ。

(②20頁8行～21頁2行)

弘徽殿太后の女三の宮が齋院に立たれ、それに伴う諸儀も盛大に行われることとなつた。その御禊の日には予め決められた上達部らが供奉することになつていたが、「とりわきたる宣旨にて、大将の君も仕うまつりたまふ」と右の文中に見えるように、帝の下命により光源氏も奉仕することとなつた。「御禊」は賀茂の祭りの前に河原に出て齋院がみそぎをされる儀式であることは言うまでもない。「応劬風俗通曰、按「周礼」、女巫掌三歳時一以祓三除疾病一。禊者潔也。故於「水上」盥潔之也」(『芸文類聚』卷四・三月三日)に類する行為で、禊除・祓禊などとも言う。「追従」はつき従うこと。「欲レ訪二神仙迹一、追従吉野潯」(大伴王「従二駕吉野宮一」『懷風藻』)「臣昔是伏二奏青瑱一之職、臣今亦追二従緑蘿之身」(菅原道真「九日後朝侍二朱雀院一同賦三閑居樂二秋水一詩序」『菅家文草』卷六「本

「朝文粹」卷八・230 などとある。「尊神」は祭られている尊い神のことで、「是神之恩也、人之幸也。春秋敬祭、將_レ伝_二子孫_一。伏請、尊神必垂_二欣享_一」(兼明親王「祭_二龜山神_一文」)『本朝文粹』卷一三・390 と見える。

頌聯の「時權」はここでは時の權勢(家)という程の意で、「露思」は露のようにはかない思いを言うだろう。詩の前半に「后腹」「三宮」等和製漢語的用法が入るのも致し方ないが、露のはかなさは「人生如_二朝露_一、何久自苦如_レ此」(『漢書』蘇武伝)「人命如_二薤上之露_一、易_二晞滅_一」(『古今注』音楽)などを挙げるまでもなく、露の命、露の身、露の世の如き語でもよく知られていよう。猶、「瑩」には「露、簾清瑩、迎_レ夜滑」(白居易「池上夜境」『和漢朗詠集』卷上・納涼160)が喚起される。露のかがやきと掛けたのだろう。この聯の第三句の方は前聯を受けて、御禊の日に物見に出かけた葵の上の一行が六条御息所の車に乱暴をはたらく所謂「車争い」の場面を念頭に詠むものである。

日たけゆきて、儀式もわざとならぬさまにて出でたまへり。
隙もなう立ちわたりたるに、よそほしうひきつづきて立ち
わづらふ。よき女房車多くて、雑々の人なき隙を思い定め

『賦光源氏物語詩』を読む(三)

てみなさし退けさせる中に、網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり。「これはさらにさやうにさし退けなどすべき御車にもあらず」と、口強く手触れさせず。いづ方にも、若き者ども酔ひすぎたち騒ぎたるほどのことはえしたためあへず。おとなおとなしき御前の人々は、「かくな」など言へど、えとどめあへず。斎宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍び出でたまへるなりけり。つれなしづくれど、おのづから見知りぬ。「さばかりにては、さな言わせそ。大将殿をぞ豪家には思ひきこゆらむ」など言ふを、その御方の人ともまじれば、いとほしと見ながら、用意せむもわづらはしければ、副車ひしりまの奥に押しやられてものも見えず。心やましきをはさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじうねたきこと限りなし。榻しきなどもみな押し折られて、すずろなる車の筒はしらにうちかけたれば、またなう人わろく、悔しう何に來つらんと思ふにかひなし。

(②22頁4行・23頁11行)

聊が長い引用になつてしまつたが、ここには光源氏の正妻であり、左大臣の女である葵の上方の供人が、その権勢を嵩^{かさ}に六条御息所の車にかなり手ひどい凌辱を加え、彼女が強い屈辱感に陥っている様子が記されている。また、第四句は、光源氏が紫の上と御襖見物に出かけた次の場面を意識してのものである。

今日も所なく立ちにけり。馬場殿のほどに立てわづらひて、
 「上達部の車ども多くて、もの騒がしげなるわたりかな」
 とやすらひたまふに、よろしき女車のいたう乗りこはれたるより、扇をさし出でて人を招き寄せて、「ここにやは立たせたまはぬ。所避りきこえむ」と聞こえたり。いかなるすき者ならむと思されて、所もげによさわたりなれば、ひき寄せさせたまひて、「いかで得たまへる所ぞとねたさになん」とのたまへば、よしある扇の端を折りて、(源典侍)「はかなしや、人のかざせるあふひゆゑ神のゆるしの今日を待ちける、注連の内には」とありける手を思し出づれば、かの典侍なりけり。

(②28頁13行、29頁11行)

老いても猶盛んな好色ぶりを發揮し、光源氏に迫ろうとする源典侍の登場は滑稽ではあるが、葵の上の死へと向かう重苦しい展開の息抜きのようなシーンになつて思うに思われる。

頸聯の二句はいずれも物語本文に見える中国詩の表現や故事(いずれも古注で指摘されている)を用いて綴られている。先ず第五句のふまえる背景について記せば次のようになるうか。前述の車争いで手ひどい仕打ちを受けた六条御息所が、懷妊中の葵の上に取り憑き、光源氏自身もそれと対面。その後葵の上は何とか夕霧を生みおとすものの、急な胸の差込みに襲われて急逝し、鳥辺野に葬られる(八月)。悔恨と懷旧にくれながら籠もり過ぐす光源氏だが、時雨が物の哀れを誘うある晩秋(妻亡き後四十九日以前)の夕暮れ時のこと、「君は、西のつまの高欄におしかかりて霜枯れの前栽見たまふほどなりけり。風荒らかに吹き時雨さとしたるほど、涙もあらさふ心地して、(源氏)「雨となり、雲とや、なりにけん今は知らず」とうち独りごちて頬杖つきたまへる」(②54頁15行、55頁4行)と見える場面と関わる。そこで口遊まれたのは劉禹錫「有所^レ嗟^二首」(其一)の「庾令樓中初見時、武昌春柳似^二腰支^一、相逢相失尽如^レ夢、為^レ雨、為^レ雲、今不^レ知」で、『河海抄』(卷五・葵)では「劉禹錫婦にをくれて作詩也」というから、劉氏が妻を失った心情に光源氏自らの心を重ねていることになる。晋の庾亮が武昌に在った時登ったという名高い南樓(『晋書』庾亮伝「世説

新語」容止篇24話等参照。白詩や本朝詩にもよく詠まれる故事」で劉氏は初めて妻と出会った。彼女は武昌の春にふさわしい柳腰の美人だったのだが、その妻との出会いや死による別れもすべてはかない夢のように思われてならず、歎愛を尽くした妻との日々も今となってははかり知れない至福の時であつたと喪失感を漏らしているのである。だが実は奇妙なことにこの二首と本文が殆ど同じ「所思二首」と題する作が『元稹集』（外集）にも収められている（花房英樹『元稹研究』彙文堂書店・昭和五二年）。兩人共湖北地方に関わりがなかったと言ひ切れないので作者はいずれか今日では決し難いようだ。ともあれ、この場面にしてこの詩句の引用とは、改めて紫式部の見識の高さに感じ入らざるをえない。猶、「為雨為雲」という表現の背景に宋玉「高唐賦」（『文選』卷一九）の故事があるのは言うまでもない。そして、第六句、正室を失い傷心の光源氏は所在なきまま朝顔の宮に手紙を届けたり、灯火近くに墓の上に仕えた女房達を集めて語らうが、やがて左大臣家を去る時がやってくる。悲しみと淋しさに包まれ、「御しつらひよりはじめ、ありしに変わることもなけれど、空蟬のむなしき心地」（②64頁12～13行）をいかんともし難く、後に残された彼の筆跡に

見入る左大臣。その目に触れたのは「旧き枕、旧き衾、誰と共にか」（「霜華白し」の詩句に題した光源氏の和歌であつた（②65頁5～10行）。その詩句は古注等に指摘されるように、白居易「長恨歌」の一節「鴛鴦瓦冷霜華重、旧枕故衾誰与共」（『新撰朗詠集』卷下・恋73。「旧枕故衾」を現存本『白氏文集』は「翡翠衾寒」に作るが本朝に早く伝承された本文は上記）をふまえる。愛する人を亡くした今、夫婦和合を象徴する鴛鴦模様の瓦には冷えびえと霜が白く重く敷き、かつて共に臥しくるまつた枕や夜具をもはや共にする者はないという、これまた喪失感を吐露する句である。即ち頸聯は墓の上を失つた光源氏の深い悲しみを反映させようとしたものである。

尾聯「夾鍾」を諸本多く「交鍾」に作るも存疑（抑「交」は誤写し易く、音通字としても用いられる）。夾鍾は二月のことで、ここでは前の巻の花宴（二月二十日あまりに催された）を指して言う。娘墓の上に対する光源氏の冷淡な態度に常日頃怨めしく思っていた左大臣ではあつたが、その花宴の舞樂の場で、春宮の慇懃に應えて彼が一節舞うと、その余りの素晴らしさに「似るべきものなく見ゆ。左大臣、恨めしさも忘れて涙落としたまふ」（①354頁11～12行）あたりをふまえているも

のと思われる。「蕭索」は(秋に木葉などが散り落ち)物淋しげなさま。「秋日蕭索、浮雲無レ光」(江淹「恨賦」)『文選』卷一六)「秋心正蕭索、況見二故人名」(「吉祥寺見二錢侍郎題二名」『白氏文集』卷二〇)「蕭索、村風吹レ笛処、荒涼隣月擣レ衣程」(高丘相如「田家秋意」『和漢朗詠集』卷下・田家58)などとあり、「霜花」は霜を見立てて言う。「長恨歌」(前述)に見えてそれをふまえるが、「九月西風興、月冷霜華凝」(「長相思」『白氏文集』卷二二)とも詠まれ、「霜花、逾入レ簷、寒氣益聲レ眉」(石上乙麻呂「贈二旧識」)『懷風藻』。ここでは白毛を譬う)は本朝の早い例。「をり知り顔なる時雨のうちそそぎて、木の葉さそふ風あわたたしう吹きはらひたるに、(光源氏の)御前にさぶらふ人々もいと心細くて、すこし隙ありつる袖ども湿ひわたりぬ」(②61頁7-9行)と光源氏が左大臣家に別れを告げに訪れた時の人々の心情、その後には彼が出てゆくのを見送って、もとの部屋(娘葵の上と光源氏が共に過ごした処)に戻り、「御しつらひよりはじめ、ありしに変わることもなければ、空蟬のむなしき心地」(前述)をかみしめざるをえなかった左大臣の心情を思いやると共に、「霜華、白し」とある所に、(源氏)君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬら

む」と書かれていたそのそばに「二、日の花なるべし、枯れてまじれり」(②65頁7-10行)と続く場面展開が末句の背景にはあるだろう。ところで、その枯れた花(常夏)とは、少し話が溯ることになるが、光源氏が大宮(葵の上の母、左大臣の妻)に歌を奉る場面と関わる。即ち、第五句の場面に続く、枯れたる下草の中に、竜胆・撫子などの咲き出でたるを折らせたまひて、中将(葵の上の兄頭中将)の立ちたまひぬる後に、若君(御乳母の宰相の君して、(源氏)「草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋のかたみとぞ見る 句ひ劣りてや御覧ぜらるらむ」と聞こえたまへり。げに何心なき御笑顔ぞいみじううつくしき。宮は吹く風につけてだに木の葉よりけにもろき御涙は、まして取りあへたまはず。(大宮)今も見てなかなか袖を朽すかな垣は荒れにし太和なでしこ、(②56頁13行-57頁7行)とあるところである。霜枯れの下草に混じり咲く撫子(常夏)に、葵の上が生み残した形見夕霧を重ね、わが子への愛着を見せる光源氏であった。

十 榊

野宮旅館榊枝有 野宮の旅館に 榊の枝有り

良夜凌晨感幾多 良夜晨を凌ぎ 感幾多ぞ

黒木鳥居臨別見 黒木の鳥居 別れに臨んで見え

青松風韻与調和 青松の風韻 調と和す

欲伴炎漢戚姬否 炎漢の戚姫に伴しからんと欲するや否や

其奈隆周成王何 其れ隆周の成王にいかん

八講齋筵当五卷 八講 齋筵 五卷に当たり

誰知簾裏戒珠磨 誰か知らん 簾の裏に戒珠を磨くことを

〈七律。多・和・何・磨（下平声歌韻）〉

卷名は見ての通り第一句目に詠込まれている。以下聯毎に訳を施すなら次のようになるだろうか。

光源氏は野宮の住居をお訪ねになられ、折り取って持参してきた榊の枝を御息所様に差入れなさったのでした。晩秋のはなやかな夕月夜、夜明け方迄（久しぶりに）彼は御息所と共に時を過ごされ（互いに心通わせた昔のことや来し方行く末を思つて）どれ程心傷ませたことでもございましょう。

黒木の鳥居（のある野宮）で（娘の齋宮と共に伊勢下向を控えていた六条御息所様と）お別れということでお会いになられたのですが、（それは）美しい松の風に吹かれる音があたかも楽（琴）の音と響き合うかと思われる頃のことでもございました。

（ところで桐壺帝がお隠れになり）あの漢の高祖の戚夫人に等しい（お立場になられて）悲惨な目に会うこと（や人の物笑いになることなど）を藤壺様が望んでおられたはずはございませんでしよう。（藤壺様がお生みになった）東宮様の状況もあの周の成王様のお立場に比べていかなものでもございましょうか（光源氏は周公旦の役割を果たしうるのでございましょうか）。

（十二月中頃に）中宮（藤壺）様の御八講が催されて、その三日目に『法華経』第五卷（提婆達多品はじめ勸持品・安樂行品・從地涌出品を所収）が講じられることになっておりましたが、中宮様が（かねてより）出家をなさるおつもりであることなど誰も存じ上げることございませんでした。

〔野宮〕は齋宮・齋院となる皇女が御齋のために一年間こも

る仮の宮殿で、斎宮の場合は嵯峨野(斎院は紫野)に置かれた。六条御息所は娘が斎宮として伊勢へ下向することになっていたので(彼女も従つつもりである)、自邸ではなくその身辺にいたので、光源氏はそこをお忍びで訪れたのである。仮りの宿なので「旅館」という。「旅館、誰相問、寒燈独可親」(戴叔倫「除夜宿三石頭賦」)など、一般的には故郷の家を空間的に遠く隔てた旅先の宿のイメージがあるが、或は嵯峨野もそんなイメージで受けとめられていたということかも知れない。「良夜」は月の美しく心地良い夜を言う。「燭々晨明月、馥々我蘭芳、芬馨良夜発、随風聞我堂」(蘇武「詩四首」其四「文選」卷二九)とある李善注に「秋月既明、秋蘭又馥」と見え、「従此無心愛良夜」、任他明月下西楼」(李益「写情」)「蕭々良夜思悠々、明月蒼々称勝遊」(藤原明衡「秋日詩」)「本朝無題詩」卷三・173)などと詠まれている。「凌晨」は夜明けになることで、「独憑朱檻、立凌晨、山色初明水色新」(庾楼曉望「白氏文集」卷一六)「愛客凌晨及下春、只催三琴酒共相逢」(冬日同賦「琴酒因客催」)「江吏部集」卷中)は例の一斑。「幾多」は白詩にも枚挙に遑いほど用いられており、どれ程(多いこと)かの意。「感幾多」とは結局

「思不^思尽」「思不^思窮」に殆ど同じで、「春色眇焉処々生、望無二辺畔幾多情」(源孝道)「春色無二辺畔」『本朝麗藻』卷上)も同様。この首聯は、「いとど御心の暇なけれど、つらきものに思ひはてたまひなむいとはしく、人聞き情なくやと思しおこして、野宮に参でたまふ。九月七日ばかりなれば」(②84頁10〜13行)「秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すく吹きあはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり」(②85頁3〜5行)という風情で、光源氏が北の対屋あたりを背景にしていよう。

(源氏)「こなたは簀子ばかりのゆるされははべりや」とて、上りあたまへり。はなやかにさし出でたる夕月夜に、うちふるまひたまへるさまにほひ似るものなくめでたし。月ごろの積もりを、つきづきしう聞こえたまはむもまばゆきほどになりければ、櫛をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて、(源氏)「変らぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心愛く」と聞こえたまへば、(御息所)神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて

折れるさかきぞ、と聞こえたまへば、(源氏) 小女子があたりと思へば、榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ

(②87頁4～15行)

そして、「めづらしき御対面の昔おほえたるに、あはれと思し乱ること限りなし。来し方行く先思しつづけられて、心弱く泣」(②88頁7～9行) く光源氏は「月も入りぬるにや、あはれなる空をながめつつ、恨みきこえたまふに、こころ思ひあつめたまへるつらさも消えぬべし。やうやう今はと思ひ離れたまへるに、さればよと、なかなか心動きて思し乱る」(②88頁12～15行) 有様であつた。「やうやう明けゆく空のけしき、こ」とさらに作り出でたらむやう」(②89頁5～6行) な趣のころ、「出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる」(②89頁9行) あたりに、名残りを惜しむ彼の心情が和歌と共に記され、御息所も返歌して「女もえ心強からず、なごりあはれにてなめたまふ」(②90頁3行) と、光源氏との一時の逢瀬の余韻をしみじみとかみしめていたのであつた。

「黒木鳥居」は言うまでもなく仮普請の野宮に設けられた鳥居である。光源氏の訪れた野宮は「ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりあたりいとかりそめなり。黒木の鳥

居どもは、さすがに神々しう見わたされて、わづらはしきけしきなるに、神官の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどちものうち言ひたるけはひなども、ほかにはさま変りて見ゆ」(②85頁10行～86頁3行) というようなところであつた。「青松風韻」は先の場面から少し戻ったところ、既に首聯のところで示している「秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すくく吹きあはせて、そのことも聞きわかぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり」とある場面をふまえ、更に「与調和」と詠んだもの。そして、勿論この表現の背景に、斎宮女御の詠(『拾遺集』四五)「二野宮に斎宮の庚申し侍りけるに松風入二夜琴」といふ題を詠み侍りける」「琴の音に峯の松風通ふらしいづれのをよりしらべそめけむ」「松風の音に乱るる琴のねをひけばねの日の心地こそすれ」を注記するのも一般的と言つてよい。「物の音ども」を聴く漢詩の発想を学ぶものである。この表現が継承されている後世の印象的な作品と言えば「亀山あたり近く松の一むらあるかたに、かすかに琴ぞ聞こえける。峰の嵐か、松風か、たづぬる人の琴の音か」と言う『平家物語』小督の一節ではあるまいか。尤も本詩の作られた正応の頃(序は四年(一二九

一)、かの『平家物語』がどのような詞章で綴られていたか確かなことはわからないが、この表現の系譜はその後も脈々と共感をもって享受されているように思う。猶、「白金換得青松樹(中略)夜深偷送「好声」来」(「松樹」『白氏文集』卷一五)は「青松」の松籟を樂しむ一例で、「禁松煙底和「風韻」一、御柳陰前引「雨声」二(藤原隆方「蟬鳴宮樹深」『天喜四年殿上詩合』)は松風の響きを「風韻」と表現する例の一斑。

「炎漢」は「皇々炎漢、非「自沛豊」(班固「高祖泗水亭碑」『芸文類聚』卷二二・漢高帝)とあり、「自「炎漢中葉」一、厥塗漸異」(「文選序」)と見える李周翰注に「漢、火徳。故称「炎」と注されるように、漢王朝が火徳であることに因む語。「戚姫」は漢高祖の寵姫戚夫人のことで、趙王如意を生んだ人である。帝位後継の太子は呂太后的子(孝恵帝)と決まっていたものの、戚夫人の願ひもあつて、高祖は彼を廢し、自分に似ている如意を太子に立てたいと考えていた。が、呂后は張良と語らい、商山四皓の協力をえてこれを阻止した。だが、彼女の戚夫人への怒りはおさまらず、高祖亡き後、趙王如意を鳩殺、戚夫人の手足耳目を断ち、厠に捨てて人彘と呼ばせたと伝えられている(『史記』呂后本紀)。この第五句は桐壺の院を亡くした藤壺中

宮の身の上と関わる。彼女は「弘徽殿」大后の御心も知りたまへれば、心にまかせたまへらむ世のはしたなく住みうからむ」(②99頁1〜3行)と思いつつ三条の里邸で心細いままに過ごしておられた。光源氏はそこを訪れ掻き口説くものの、冷淡な反応に憂悶を募らせるわけだが、一方彼女は「よろづのこ」とありしにもあらず変りゆく世にこそあめれ、戚夫人の見けむ目のやうにはあらずとも、かならず人笑へなることはありぬべき身にこそあめれ」(②114頁4〜6行)と心中思い、出家する決意を固めつつあつた。弘徽殿大后(漢高祖の正室呂太后に比す)側の心理的圧力に耐えられる程の強力なバックアップは既に彼女にはなかつたのである。猶、「其奈「何」の句法については有名な「其奈其如ノ字、樂天最好ンデ用ヒタリ。下に何ノ字ヲ拘ヘタルモアリ、拘ヘザルモアリ。句意ヲ審ニスルニ、其ノ字ヲ加ル時ハ、イカンガセント云程ニ、セマリテ強キ也」(『詩轍』卷六)の記事を挙げておこう。そこに記されるように白居易の詩に確かによく見える。「隆周」は周王朝の隆盛を称えて言う。「隆周為「藪沢」一、皇漢成「山樊」二」(王僧達「和「琅邪王依「古」」『文選』卷三一)「隆周之ト既永、宗漢之兆存レ焉」(顔延年「三月三日曲水詩序」同上卷四六)と見える注に

は揚雄「河東賦」の用例が引かれているが、本朝でも「隆、周三典、漸増^二其流^一、大漢九章、逾分^二其派^一」(小野篁「令義解序」)『本朝文粹』卷八・197)などと見えている。成王は周武王の子。父が死んだ時まだ幼少であつたため、叔父の周公旦が摂政に就き代つて政事を執つた。且はかつて武王が殷を倒した時、魯の曲阜に封じられていた。が、天下が未だ安定をみず武王を輔佐することに専念してゐて、赴任できずにいた。武王亡き後も襁褓の成王が残されたので、天下安寧のために摂政に就いた。そして、自らの代理として子の伯禽を封じ魯に赴かせる時に訓戒して言つたのが次の言葉である。「我文王之子、武王之弟、成王之叔父、我於天下亦不^レ賤矣。然我一沐三捉^レ髮、一飯三吐^レ哺、起以待^レ士、猶恐^レ失^二天下之賢人^一。子之^レ魯、慎無^二以^レ國驕^レ人^一」(『史記』魯周公世家)、つまり「わしは文王の子で武王の弟、成王の叔父であり、この天下においては賤しからざる身であるが、一たび洗髪する間にも三たび中止し、一度の食事にも三度口中の物を吐き出しては席を立ち、立派な人に会うようつとめてゐる。それでも猶賢人を失ひはせぬかと恐れているのだが、お前も魯に着任したら、国君だからと言って人に驕るようなことがあつてはならぬぞ」というわけである。

天子に戲言無しと成王に説き、その病める時には平癒を祈り、異心なく仕え、周の治政の安定をひたすらはかり、後に周文公と諡^{ちり}され、本朝の詩文にもよく詠まれる大聖である。理想に燃えていた若い頃の孔子がしばしば夢にまでみて憧れた人物が周公旦その人であつた(『論語』述而)。ところで、この第六句は、次の尾聯の法華八講の章段より後の藤壺の出家、左大臣の辞任をへて、三位中将(頭中将。葵の上の兄であり左大臣の息)と所在なきままに文事に興ずるなどして過ごされる場面を背景にしている。夏の雨の日の韻塞ぎで負けてしまつた中将側が響応する作文・管絃の宴が開かれ、そこで光源氏の姿が「文王の子、武王の弟、とうち誦じたまへる、御名のりさへぞげにめでたき。成王の何とかのたまはむとすらむ。それはかりやまた心もとなからむ」(②143頁3〜5行)と語られてゐるのだつた。口遊まれた前掲の『史記』の一節は余りに有名で、大江朝綱も「周公旦者、文王之子、武王之弟、自知^二其貴^一」(『貞信公天皇元服後辭^二摂政^一表』)『本朝文粹』卷四・103。『朗詠』の古写本中にこれを巻下・丞相付執政の箇処に載せるものもある)とそのまま自句に取込んで用いていたのであつた。

「八講」は法華八講で、『法華經』八卷を朝夕二座四日間の八

座で講じられる追善の法会のことである。この一句、物語本文では「中宮は、院の御はてのことにうちつづき、御八講のいそぎを、まざまに心づかひせさせたまひけり」(②128頁11〜13行)「十二月十余日ばかり、中宮の御八講なり。いみじう尊し。日々に供養せさせたまふ御経よりはじめ、玉の軸、羅の表紙、帙^ぢ質^しの飾りも、世になきさまにととのへさせたまへり。さらぬことのきよらだに、世の常ならずおはしませば、ましてことわりなり。仏の御飾り、花机の覆ひなどまで、まことの極樂思ひやらる。初めの日は先帝の御料、次の日は母後の御ため、またの日は院の御料、五巻の日なれば、上達部なども、世のつつましさをえしも憚りたまはで、いとあまた参りたまへり」(②129頁10行〜130頁6行)とあるあたりを背景としている。『法華經』の第「五巻」は提婆達多品・勸持品・安樂行品・從地涌出品の四品から成り、この巻五が講じられる日は八講のクライマックスといわれて、関係者が多数様々な捧げ物を持って参会したのだった。「斎筵」は「講肆安敞、斎筵巨翼」(王勃「舍利塔碑」)「昔一波羅門之展、斎筵」、広勳「三明之炬」(三善道統「為二空也上人一供二養金字大般若經一願文」『本朝文粹』卷一三・409)とあり、ここでは法華八講の法会を指す。「戒珠」は仏の

戒めは清らかなもので珠玉に譬えられる。「精進持三淨戒」、猶如「護三明珠」(序品)「若見下仏子、持レ戒清潔、如二淨明珠一、求中大乘經上」(譬喻品)などと『法華經』に見え、「戒珠、靡レ欠、忍鎧無レ違」(梁簡文帝「智信法師墓誌銘」)などである。御仏の教えを磨くということは出家することを言う。仏に帰依し受戒して修行に打ち込むことを表現するもので、先の引用本文の後に続いて、八講の「最終の日、わが御事を結願にて、世を背きたまふよし仏に申させたまふに、みな人々驚きたまひぬ。兵部卿官、大將の御心も動きて、あさましと思す。親王(藤壺の兄。兵部卿官)は、なかばのほどに立ちて入り、たまひぬ。心強う思し立つさまをのたまひて、果つるほどに、山の座主召して、忌むこと受けたまふべきよしのたまはす」(②130頁12行〜131頁2行)と見えるように、藤壺の突然の出家表明に、その兄や光源氏も驚き狼狽する。「なかばのほどに立ちて入り」とあるのは、藤壺の居る「簾裏」(かきり)に入つて兄が翻意を説いたのだから、「心強う思し立つ」とあるように、彼女なりの苦悩の果ての決心は堅かつたのである。

十一 花散里

雨過雲晴行路側 雨過ぎ 雲晴る 行路の側

桂風振葉屢和琴 桂風 葉を振はせて 屢 琴に和す

木繁庭望月孤影 木繁き庭に望む 月の孤影

花散里媒鳥一音 花散る里の媒なみだちは 鳥の一音

宮掖故姬談在昔 宮掖の故姫は 在昔むかしを談かたり

羽林上將問來今 羽林の上將は 來今を問ふ

先朝往事不能忘 先朝の往事 忘る能はず

相近与君共濕襟 相近づきて 君と共に襟えりを濕うるせり

〔七律。琴・音・今・襟（下平声侵韻）〕

花散里の卷名は第四句に詠込まれている。この卷は他の卷に比べ本文が圧倒的に短く、物語本文との対照も容易である。聯毎に訳すと次のようになるだろう。

五月雨がやんで雲も晴れ渡り、光源氏様が（麗景殿女御様の御邸に）ゆかれる途次その傍（の中川）に、桂の木を吹く風の葉をそよがせる音と琴の音がしばしば調和しておりました（ので旧もとのその女のもとに立寄られ和歌を送り、情をおかけになったのです）。

『賦光源氏物語詩』を読む（二三）

（訪れました）麗景殿女御（故桐壺帝の女御の一人）様の御宅の庭では木暗い程に木が茂り、（五月二十日の）月の光が眺めやられ、橘の花の散るこの里邸きとではほととぎすの一声が双方の仲をとりもつものとなったのです。（かつて）宮中にいらした麗景殿女御様の処にお伺い致しまして昔の思い出など語り合われまして、近衛大将（光源氏）様も（帝亡きあと）今日に至る迄のことなどお尋ねになられたのでございます。

（かの方は）先帝と過すごされました日々をお忘れになることもおできにならず、互いに身をお近づけになって、共に襟を涙でぬらしたことでございました。

「雨過」は雨が降りやむ、通りすぎる意。白詩にも見えるが、「雲収星月浮二山殿一、雨過風雷遶二万壇一」（許渾「題二飛泉觀宿龍池一」）を挙げておく。「雲晴」は雲がなくなり晴れ渡る意でこれもありふれた語。「鶯暖初帰レ樹、雲晴恋二山石一」（錢起「歲初帰二旧山一酬二寄皇甫侍御一」）「長安日近望難レ弁、碧落雲晴何可レ摩」（具平親王「過二秋山一」）『本朝麗藻』卷下）はその例。「行路」とは道ゆき。「満庭花落迷二行路一、遶レ院泉声写二半山一」（庄翱「尋二幽居一不レ遇」）『千載佳句』卷下・

山居一〇〇〇)「出^レ門唯見揚^レ鞭云、行^レ路不^レ知幾日程」(朝野鹿取「奉^レ和^二春閨怨^一」『文華秀麗集』卷中)などある。猶、白詩では人生行路の意で用いられることが多い。この首聯は、光源氏が麗景殿女御邸の訪問を思い立ち、「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ」(②154頁1〜2行)と、その途次「忍びて中川のほどおはし過ぐるに、ささやかなる家の、木立などよしばめるに、よく鳴る琴をあづまに調べて搔き合はせ賑しく弾きなすなり。御耳とまりて、門近なる所なれば、すこしさし出でて見入れたまへば大きな桂の樹の追風に祭のころ思しい出でられて、そこはかとなくけはひをかしきをただ一目見たまひし宿なりと見たまふ」(②154頁5〜10行)と記される場面を綴ったものであらう。「桂風」は物語文中に既に見えたように桂の木に吹く風。「荷露氣 桂風香」(兼明親王「遠久良養生方」『本朝文粹』卷一・38)とあるのはその芳香に中心があるが、本詩では賀茂祭で葵を桂枝に結びつける習慣があったことが背景にあるうか。「振葉」は桂の葉が風に揺れ動くことを言うが、下に「和琴」と続く文脈から、「振木(列子曰、秦青折^レ節悲歌、声振^二林木^一、響遏^二行雲^一)」(『初学記』卷一五・歌)と見える故事(素晴らしい歌声が林木をふる

わせるのだが)を縁として稿者は思い浮かべたりもする。既に榊巻の詩の第四句で記した通り、松などの木々を吹く風音が琴に重ねられることも意識され桂風に応用したのかも知れない。また、「和琴」(倭琴)とみて、文中に見える東琴に字面上掛けて綴っているようにも思える。猶、「和」は調子を合わせる意では仄声であり、ここは平声でなければならぬところなのだ、他にこれに替わる字がなかったのでこのようなことになつていたのであらう。

領聯の第三句は、光源氏が麗景殿女御を訪れ共に昔物語を一夜も更けて「(五月)二十日の月さし出づるほどに、いとど木高き影ども木暗く見えわたりて、近き橋のかをりなつかしく匂ひて、女御の御けはひ、ねびにたれど、飽くまで用意あり、あてにらうたげなり」(②156頁1〜4行)と描写される部分をふまえたもの。後の須磨の巻にも、光源氏が花散里を訪れるシーンがあり、そこでも「月おぼろにさし出でて、池広く山木深きわたり、心細げに見ゆる」(②174頁11〜12行)と見えている。彼女は「宮たちもおはせず」(②153頁6行)「ただこの大将殿(光源氏)の御心にもて隠されて過ぐしたまふ」(②153頁7〜8行)人で、「人目なく静かにておはするありさまを見たまふも

いとあはれ」(②155頁14～15行)なる孤独で物淋しい生活を送っているようだが、それを「月孤影」の景趣に重ねているのであろう。第四句は、「ほととぎす、ありつる垣根のにや、同じ、声にうち鳴く。慕ひ来にけるよ、と思さるるほども艶なりかし。」「いかに知りてか」など忍びやかにうち誦じたまふ。(源氏)橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」(②156頁8～12行)とあるあたりをふまえていよう。その文中の「ありつる垣根のにや」とは、首聯で述べた中川の女の所に立寄った条の後に「をりしもほととぎす鳴きて渡る。催しきこえ顔なれば、御車おし返させて、例の惟光入れたまふ」(②154頁12～13行)とあったことをふまえている。この中川の女に声をかける場面のほととぎすは、「催しきこえ顔なれば」とあって、好色と関わる(処定めず鳴く多情さ故に)イメージが稿者には強いように思えてならない。「郭公、本、自、意、浮、華、四遠無レ栖汝最著、性似三肅郎含二女怨一、操如二蕩子尚迷レ他」(『新撰万葉集』卷上・夏歌二十一首「誰が里に夜がれをしてか郭公鳥ただここにしも寝たる声する」に番えられた漢詩)という含意である。中国古典詩には恐らくこのイメージはなからうが、本朝では後世への影響少なくないようだ。そして、「鳥一

音」(音は押韻の関係で用いたもので声に同じ)について、稿者が直ちに思い浮かべるのは、「一声山鳥曙雲外、万点水蛭秋草中」(許渾「自二楞伽寺一晨起汎レ舟道中有レ懷」『千載佳句』卷上・早秋156『和漢朗詠集』卷上・郭公182)であろうか。許渾は他でも「山鳥一声人未レ起、半牀春月在二天涯一」(『南海府罷南康阻(下略)』)と用いているものの、その「山鳥」がほととぎすを指すかどうかは解釈者に依るだろう。本朝では「高林滴レ露夏夜清、南山子規啼一声」(韋応物「子規啼」)の類同様に解され、『朗詠』では郭公の部立に入れられたということになろうか。ほととぎすの「一声」を詠む和歌も少なくない。猶、詩句中の「媒」については、鈴木日出夫氏が『和泉式部日記』は式部が、亡き為尊親王への追慕から、その弟宮の敦道親王との新しい恋へと転ずるところから開始されるが、式部が亡き親王の弟宮を「ほととぎす」となぞらえて歌を詠むことが、その重要な契機となっている。『源氏物語』にも、これが回想を促す鳥として数多くとりこまれている。花散里巻では、苦境に立たされた光源氏の心を、「ほととぎす」と、「橘の花」が、彼を、いつくしんでくれた桐壺院在世の過往へと誘う物語となっている(「不如帰」『王朝文化辞典』朝倉書店・二〇〇八年)と指

摘される通りの含意に受取つて良いように思う。

「宮掖」は宮中の意。「掖」は掖庭、後宮のこと、「只得三年備_二宮掖_一、何曾專_レ夜奉_二幃屏_一」(『昭君怨』)「白氏文集」卷一六「君魂花笺馳_二宮掖_一、我意鷗飛到_二海門_一」(『奉_レ酬_乙讚州昔使君聞_下群臣侍_二内宴_一 賦中花鳥共逢_上春見_レ寄_{什甲}』)「田氏家集」卷下)などに見える「失_レ寵_故、姫婦_レ院夜、没_レ蕃老将_上樓時」(『中秋月』)「白氏文集」卷一六)は「故姫」の一例。古参の美姫。ここは前の中宮の麗景殿女御を指すことと言うまでもない。「在昔」はむかし。「自_レ古在昔、先民有_レ作」(『毛詩』商頌「那」)の毛伝に「古曰_二在昔_一」と見え、「文選」に類出する語彙で、「在昔姦臣称_二乱紫微_一」(陸雲「大將軍宴会被_レ命作_レ詩」)「文選」卷二〇)とあり、「在昔釣魚士、方今留鳳公」(高向諸足「從_二駕吉野宮_一」)「懷風藻」)と用いられている。「羽林」は「左右近衛府(当_二唐羽林_一」)。又云「親衛」(『職原鈔』下)とあるように近衛府を指し、光源氏が当時近衛大将であつたので「上将」と記している。「来今」は今より後、また、このごろの意。「経_レ阻貴_レ勿_レ遲、此理著_二来今_一」(張協「雜詩十首」其六「文選」卷二九)とある李善注に「漢書。杜業上書曰、深思_二往事_一以戒_二来今_一」、呂向注には「思_二往

古王陽文王之事_一、故戒_二之於今日_一也」とある。この頸聯の第五句は光源氏が麗景殿女御を訪れた場面を記した「かの本意の所は思しやりつるものしく、人目なく静かにおはするありさまを見たまふもいとあはれなり。まづ、女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり」(②155頁13行、156頁1行)とある条である。このすぐあと前述した頷聯の背景となる場面が続く。第六句は先の訳のように女御との語らいのみに限定して解することが妥当だろうが、西面の対の屋に住む花散里(女御の妹三の宮)を訪れる場面(②157頁9行、158頁4行)あたりを意識して綴ると見ることもまたできようか。

「先朝」は「昔楊子雲先朝、執戟之臣耳」(曹植「与_二楊德祖_一書」)「文選」卷四二)とあり先の朝廷の意。前朝と云うに同じ。「往事」は白詩にも例多く「往事、渺茫都似_レ夢、旧遊零落半歸_レ泉」(十年三月三十日別_二微之於澧上_一二十四年三月十一日夜遇_二微之於峡中_一(下略))「白氏文集」卷一七「千載佳句」卷上・感歎517「和漢朗詠集」卷下・懷旧742「往事、勿_二追思_一、追思多_二悲愴_一」(有感三首)其三「白氏文集」卷五一)などはその寸例。また、「不能忘」は「蘭有_レ秀兮菊有_レ芳、懷_二佳人_一兮不_レ能_レ忘」(漢武帝「秋風辭」)「文選」卷四五)「不_レ

能^レ忘^レ情吟」(『白氏文集』巻七〇)などに見えるようによく用いられ、忘れえぬ意。「湿襟」は(涙で)えりをぬらす、泣く意。「離襟、涙猶湿、廻馬嘶未^レ歇」(『送兄弟廻雪夜』)、『白氏文集』巻一〇)「山家侵^二曉霧^一、誰憚^二幽襟^一」(『薄霧』)『菅家文章』巻二)などは参考例。この尾聯は、光源氏が「昔の御物語など聞こえたまふ」(②156頁1行)うちに、「すぐれてはなやかなる御おぼえこそなかりしかど、睦まじうなつかしき方には思したりしものを、など思ひ出できこえたまふにつけても、昔のことかき連ね思されてうち泣きたまふ」(②156頁4、7行)とあり、この後、既に領聯のところで触れた光源氏の「橘の香をなつかしみ」の歌がきて、「いにしへの忘れがたき慰めにはなほ参りはべりぬべかりけり。こよなうこそ紛ることも、数そふこともはべりけれ。おほかたの世に従ふものなれば、

昔^{むかし}語^{がたり}もかきくづすべき人少なうなりゆくを、ましていかにつれづれも紛れなく思さるらん」(②156頁13行、157頁1行)と女御に慰め語りかける場面を背景にしていることが知られよう。

(注)

(1) 松風と琴の音については、新間一美「新樂府「陵園妾」と源氏物語——松風の吹く風景——」(『源氏物語と白居易の文学』和泉書院・平成一五年)「松風」と「琴」——新撰万葉集から源氏物語へ——」(『源氏物語の構想と漢詩文』和泉書院・平成二二年)に詳しく、「源氏物語」のこの条については場面の性格から「陵園妾」の表現を殊に意識すると説いておられる。